

妻も愛人も他人棒 ～夫の目の前で堕ちる二人～

— 序章 —

六月の雨が窓ガラスを叩く音だけが、リビングに響いていた。

田中美咲(29歳)はソファに腰掛け、冷めかけたハーブティーを両手で包み込んでいた。壁にかかった結婚写真に写る自分は、こんなにも幸せそうに笑っていた。あれから六年。時間は信じられないほど静かに過ぎていった。

「ただいま」

玄関のドアが開く音。夫の優太(31歳)が帰ってきた。いつもの時間、いつもの足音、いつもの「おかえり」を告げる自分の声。すべてが予定調和の中にあった。

「お疲れ様。今日も遅かったね」

「うん、月末だからさ。ごめんね」

優太は苦笑いを浮かべ、ネクタイを緩めながら浴室へと向かう。その背中を見送った美咲の胸の奥に、小さな棘が刺さったような感覚があった。

—最近、少しだけ抱きしめられる回数が減った。

気のせいだと思ったかった。六年という月日は、どんな情熱も穏やかな安心へと変えてしまう。それが結婚というものだと、自分に言い聞かせていた。

その夜のことだった。

優太が浴室から出た後、スマホを洗面台に置き忘れたことに気づいたのは、美咲の些細な習慣だった。夫のスマホを充電器に繋ぐ。それだけの行為。何百回と繰り返してきた日常の一部。

しかし、画面にポツンと浮かんだ通知が、美咲の世界を一変させることになる。

『美奈: 今日楽しかったよ♡ またね♪』

美咲の指が止まった。美奈。その名前に心当たりはなかった。いや、あったとしても、認めたくはなかった。

震える指で画面をタップする。ロック画面の向こうに広がっていたのは、大量のヌード写真。若く瑞々しい肌。見知らぬ女性の肢体。そして、その一枚一枚に添えられた優太からのメッセージ。

—「美奈ちゃん、可愛い」

—「もっと見せて」

—「来週、いつにする？」

美咲はスマホを握りしめたまま、床に崩れ落ちた。声が出なかった。涙も出なかった。ただ、胸の奥で何かが冷たく砕けていく感覚だけがあった。

翌朝、美咲はいつも通りに朝食を作った。味噌汁の香りが台所に漂う。何も変わらない朝。ただ、テーブルの向かいに座る優太の顔を、美咲はまっすぐに見つめていた。

「優太」

「ん？」

「美奈ちゃんって誰？」

箸を止める優太の動作。一瞬の沈黙。そして、ゆっくりと顔を上げた優太の目には、隠しきれない動揺があった。

「……どうして」

「スマホ。見ちゃった」

美咲の声は驚くほど冷静だった。それは怒りではなかった。六年間築いてきた信頼が、音もなく崩れていくのを感じているだけだった。

優太は箸を置き、深く頭を下げた。

「……ごめん。美奈は会社の後輩で……」

「付き合ってるの？」

「……うん」

「どれくらい？」

「……半年くらい」

半年。美咲が何気ない日常を送っていた半年間、優太は別の女性と時間を共有していた。その事実が、美咲の胸を深く抉る。

「……許すから」

優太が顔を上げた。信じられないという表情を浮かべる夫に、美咲は静かに告げた。

「美奈ちゃんに会いたい」

数日後、カフェの窓際の席に、美咲と美奈(24歳)が向かい合って座っていた。

美奈は想像通りの女性だった。若く、可愛らしく、どこか危うげな魅力を漂わせている。優太が惹かれた理由は、美咲にも理解できた。

「田中さんの奥様ですよね……ごめんなさい」

美奈は申し訳なさそうに目を伏せる。しかし、美咲は美奈を責めるつもりはなかった。むしろ、目の前の女性に対して、奇妙なほどの好奇心を抱いていた。

「美奈ちゃん、お願いがあるの」

「……何ですか？」

美咲は静かにスマホを取り出し、自分のヌード写真を一枚、美奈に見せた。美奈が目丸くする。

「私の写真と、あなたの写真を交換しない？」

美奈は驚きを隠せない様子だった。しかし、美咲の目には、真剣な光が宿っていた。それは嫉妬でも、復讐でもなく、美咲自身にも理解できない衝動だった。

「……いいんですか？」

「ええ」

こうして、二人の女性の間には、奇妙な関係が芽生えた。

それから数週間が過ぎた。

美咲と美奈は、互いのヌード写真を送り合うようになっていた。最初はただの好奇心だった。しかし、回数を重ねるうちに、美咲は美奈の体に惹かれていく自分に気づき始めた。美奈の肌の質感、曲線の美しさ、そして写真から伝わる温もり。それらすべてが、美咲の心を捉えて離さなかった。

ある夜、美咲は優太に向かって、信じられない言葉を口にした。

「優太、美奈ちゃんと3Pしない？」

優太は箸を落とした。冗談だと思ったのか、それとも妻の正気を疑ったのか。しかし、美咲の目は笑っていなかった。

「本気よ」

—三人の夜が、もうすぐ始まろうとしていた。

—— 第一章：三人の夜 ——

一

土曜日の午後、田中家のキッチンからいい匂いが漂っていた。

美咲はエプロンを付け、ハンバーグのタネをこねている。その横で優太がサラダの野菜を切っていた。六年間の結婚生活で培われた阿吽の呼吸。言葉を交わさずとも、手が自然と動く。

「今日は美奈ちゃん来るんだよね」

優太が何気なく言った。その声には、隠しきれない緊張が滲んでいた。

「うん。八時頃って言ってた」

美咲は手を止めずに答えた。平坦な声。感情を押し殺したような。

一週間前のあの夜以来、二人の間には見えない壁ができていた。美咲が優太の浮気を知り、問い詰め、そして——許した。少なくとも表面上は。

しかし、美咲の心の中では、小さな火種がくすぶり続けていた。

二

午後八時。

インターホンが鳴り、美咲がドアを開けると、美奈が立っていた。

「こんばんは……お邪魔します」

美奈は小さく頭を下げた。黒いワンピースに薄化粧。控えめでありながら、その存在感は隠せない。若く、瑞々しい。美咲は美奈の姿を見て、改めて思った。

——この子が、優太の——

「どうぞ、入って」

美咲は微笑んだ。敵意のない微笑み。しかし、その奥にある感情を美奈は読み取れなかった。

リビングに入ると、優太がソファから立ち上がった。

「美奈ちゃん、来たね」

「お疲れ様です、優太さん」

二人の視線が交わる。その一瞬の空気に、美咲は気づいた。目が合った瞬間、わずかに緩んだ二人の表情。半年間の関係が作った、見えない絆。それが美咲の胸をちくりと刺した。

—やっぱり、この二人の間には、私の知らない時間があるんだ。

三

食事は和やかに進んだ。

美咲の手料理を美奈が「美味しい」と頬張り、優太がワインを注ぎ、三人で笑い合う。一見すれば、仲の良い夫婦とその友人。しかし、テーブルの下には見えない感情が渦巻いていた。

食後、美咲はワインボトルをもう一本開けた。グラスに赤い液体が注がれる。三つのグラスが並んだ。

「美奈ちゃん、ちょっと聞いてもいい？」

美咲が静かに切り出した。グラスを指で回しながら。

「優太のこと……好き？」

美奈がグラスを止めた。優太も固まった。

「突然、ごめんね。でも、知りたいの」

美奈は迷うように視線を彷徨わせ、やがて小さく頷いた。

「……好きです」

嘘ではなかった。美奈の目に宿った光は、本物だった。そのことが、美咲の心に深く突き刺さる。

「そっか」

美咲はグラスを飲み干した。そして、意を決したように顔を上げた。

「じゃあ、今夜——三人で一緒にいようか」

四

寝室の照明を落とした。

キャンドルの炎が三人の影を壁に揺らす。美咲は優太の前に立ち、ゆっくりと優太のシャツのボタンを外した。

「優太、私のこと好き？」

「……好きだよ。当たり前だろ」

優太の声は震えていた。それは嘘ではなかった。六年間、美咲を愛してきた。美奈との関係はあったが、美咲への愛情が消えたわけではない。それが優太の罪であり、また弱さでもあった。

「じゃあ、美奈ちゃんのこと好き？」

優太は答えられなかった。沈黙が答えだった。

美咲は優太のシャツを脱がせ、美奈の方へ手を差し伸べた。

「美奈ちゃん、おいで」

美奈は美咲の手を取り、立ち上がった。美咲は美奈のワンピースのファスナーに指をかけ、ゆっくりと下ろした。布が滑り落ち、美奈の白い肌が露わになる。

美咲は美奈の背中にそっと手を這わせた。滑らかな肌。自分の夫が半年間触れていた肌。

——温かい。

美咲の心の中で、名前のつかない感情が渦巻いた。

「優太、見てて」

美咲は美奈の肩に唇を寄せた。美奈が小さく息を呑む。その息遣いが、美咲の奥底にある何かを刺激した。

優太は二人の様子を見つめていた。妻が自分の浮気相手の体に触れる。その光景は、言葉では表せない感情を呼び起こした。しかし、優太は目を逸らさなかった。逸らせなかった。

五

三人はベッドの中で絡み合った。

最初は優太が中心だった。美咲を抱き、美奈を抱く。二つの体を交互に愛撫し、二人の名前を呼ぶ。美咲は優太の胸に顔を埋め、美奈は優太の背中に腕を回す。

優太は必死だった。二人を愛そうとしていた。美咲への罪悪感と、美奈への愛おしさ。その二つを同時に満たそうとするかのように、優太は二人の体を交互に抱きしめた。

「美咲、ごめん……愛してる」

優太が美咲の額に口づけをする。美咲は目を閉じ、その温もりを受け入れた。

「美奈ちゃんも……好きだよ」

優太が美奈の手を握る。美奈は涙ぐみながら頷いた。

——優太は、本当に二人のことを愛している。

美咲は思った。この男は、誰も傷つけないのだ。だからこそ、誰かを必ず傷つけてしまう。

六

しかし、夜が深まるにつれて、変化が現れ始めた。

優太が美奈を抱く時間が、少しずつ長くなっていった。美奈の首筋に唇を寄せる優太。美奈が甘い声を上げる。その声が、美咲の耳に届いた。

——優太の、知らない顔。

美咲は横で二人の様子を見つめていた。優太が美奈の中にいる時、優太の表情は美咲に向けるものとは違っていた。もっと貪欲で、もっと無防備で、もっと——幸せそうだった。

美咲は自分の体に手を這わせた。自分で触れるしかなかった。優太の視線は美奈に向いている。優太の手は美奈の肌の上にある。

——私、一人だわ。

その事実が、美咲の胸を冷たく貫いた。

七
やがて、優太は美咲の元へ戻ってきた。

「美咲、ごめん……」

優太は美咲の体を抱きしめた。しかし、その腕の中には美奈の匂いが残っていた。美咲はその匂いを嗅いだ時、心の奥で何かが音を立てた。

——この匂いは、私のものじゃない。

優太は美咲を愛そうとした。美咲の肌に唇を寄せ、名前を呼ぶ。しかし、美咲は目を開けていた。天井を見つめながら、考える。

——優太は私を愛している。それは嘘じゃない。でも、美奈ちゃんを愛しているのも嘘じゃない。だったら——

美咲の視線が、横で息を整えている美奈に向けられた。

美奈は薄目を開け、美咲と目が合った。その瞬間、美奈は小さく微笑んだ。罪悪感と、それ以上の何かが混じった微笑み。

美咲の心臓が跳ねた。

——この子のこと——

美咲は理解しかけていた。自分の中に芽生えた感情が、優太への愛でも嫉妬でもない、別の何かであることに。

八
朝が来た。

美奈はシャワーを浴び、帰り支度を整えた。玄関で、美咲が美奈を呼び止めた。

「美奈ちゃん」

「はい」

「また——来てくれる？」

美奈は驚いたように目を丸くし、やがて小さく頷いた。

「……うん。呼んでくれたら、いつでも」

美奈が出て行った後、美咲はドアに背を預け、天井を見上げた。

リビングからは、優太が朝食を作る音が聞こえる。いつもと変わらない音。しかし、美咲の心には、もう以前のように戻れない予感があった。

——美奈ちゃんの肌の温もり。

あの夜、美咲が美奈の体に触れた時の感覚が、指先に残っていた。優太の体温よりも、ずっと鮮明に。

美咲は自分の手を見つめた。この手が、もうすぐ自分の意志では止められない場所へ伸びてしまうことを、美咲は予感していた。

—— 第二章：蝕まれる愛 ——

—

あの夜から二週間が過ぎた。

田中家の日常は、一見すると以前と変わらないように見えた。朝起きて、優太が出社し、美咲が家事を済ませる。夕方になれば優太が帰ってきて、二人で食事をする。

しかし、美咲のスマホには、毎日のように美奈からのメッセージが届いていた。

『美咲さん、今日可愛い下着買ったの』

『見てほしいな……』

添付された写真。美奈の白い肌に、黒いレースが寄り添う。美咲はその写真を見るたびに、胸の奥が熱くなるのを感じていた。

美咲もまた、自分の写真を送っていた。浴室で撮った裸身。ベッドで横たわる体。美奈に見てもらいたいという欲求が、日々強くなっていく。

——優太には見せたことのない表情を、美奈ちゃんには見せている。

その背徳感が、美咲を駆り立てた。

二

水曜日の午後。

美咲は美奈を家に招いた。優太が仕事で遅くなると聞いたからだ。

リビングのソファに並んで座り、お茶を飲む。他愛のない会話。しかし、二人の間には空気が張り詰めていた。

「美奈ちゃん」

美咲がそっと手を伸ばし、美奈の頬に触れた。美奈がびくりと体を震わせる。

「あの時……優太が美奈ちゃんを抱いてる時、私見てたの。わかる？」

「……うん」

「美奈ちゃん、すごく綺麗だった。優太も……私に向けるのとは違う顔してた」

美咲の手が美奈の頬から首筋へ、そして鎖骨へと滑り落ちていく。美奈の呼吸が荒くなった。

「ねえ、美奈ちゃん。優太がいなくても——二人きりでもいいよね？」

美咲は美奈の唇に自分のそれを重ねた。

リビングのカーテンの隙間から差し込む午後の光の中で、二人の女性は互いの体を確認合った。美咲は美奈のブラウスのボタンを外し、現れた肌に唇を押し当てる。美奈は美咲の髪に指を絡め、小さく声を漏らした。

「美咲さん……好き」

その言葉が、美咲の心を溶かした。優太から久しく聞いていない言葉。いや、優太からは何度も聞いているはずの言葉。なのに、美奈の口から出たその言葉は、まるで別の意味を持っているかのように響いた。

——私、この子を——

美咲は美奈の体を抱きしめた。夫のベッドで、夫のいない家で。その背徳感が、美咲をさらに深く溺れさせていった。

三

金曜日の夜。

優太は美咲のために久しぶりにレストランを予約した。

「美咲、最近なんだか疲れてるみたいだからさ。美味しいもの食べて、リフレッシュしよう」

優太はそう言って、美咲のために席を引いた。エレガントな店内。柔らかな照明。グラスに注がれたワイン。優太の心遣いは、昔と変わらず温かかった。

「ありがとう、優太」

美咲は微笑んだ。しかし、その笑顔の裏には、別の感情が渦巻いていた。

——優太は優しい。本当に優しい。でも——

「美咲、明日は家でゆっくりしようね。美奈ちゃんも呼んで、三人で——」

美咲の箸が止まった。

「……また三人で？」

「うん。あれから二人きりの時間があまり取れてなくてさ。美咲とも、美奈ちゃんとも、ちゃんと向き合いたいと思って」

優太は真剣な目で美咲を見つめた。この男は本気だった。二人を愛そうとしている。どちらも失いたくないという、身勝手でありながら本心からの愛情。

「……うん。わかった」

美咲は頷いた。しかし、心の中では別の声が響いていた。

——優太はまだわかっていない。私が求めているのは、三人の時間じゃないって。

四

土曜日の夜。

再び田中家の寝室に、三人の影があった。

優太は前回の反省からか、美咲を中心に愛そうとしていた。美咲の体を抱きしめ、耳元で「愛してる」と囁く。美咲の肌に唇を寄せ、丁寧に愛撫する。

「美咲……ごめんね。もっと大切にするから」

優太の指が美咲の体を這う。しかし、美咲の心は冷えていた。優太の体温が届かない。優太の愛情が、皮膚の上を滑っていくだけ。

「優太……美奈ちゃんも」

美咲は優太の手を取り、美奈の方へ導いた。

「美奈ちゃんも抱いてあげて」

優太は戸惑ったが、美咲の言葉に従った。美奈の体に手を伸ばす優太。美奈が小さく声を上げる。

美咲は二人の様子を見つめていた。優太が美奈を抱く。その光景は前回と同じはずだった。しかし、美咲の心には、前回とは違う感情が湧き上がっていた。

—嫉妬じゃない。違う。

美咲は自分の胸に手を当てた。心臓が早鐘を打っている。しかし、それは優太への嫉妬ではなかった。美奈への—渴望だった。

—美奈ちゃんに触れているのは、優太じゃなくていい。私が—私が触れたい。

美咲は震える手で、美奈のもう片方の手を握った。美奈が美咲を見る。二人の視線が絡み合う。

「美咲さん……」

「美奈ちゃん—」

優太は気づかなかった。自分が美奈を抱きながら、二人の女性が互いの目だけを見つめ合っていることに。

五
事後。

優太は満足そうに眠っていた。二人の女性を愛した充足感。どちらも失わなかった安堵感。優太はそう信じて眠っていた。

しかし、美咲は眠れなかった。

美奈もまた、眠れずにいた。二人は優太を挟んで横になりながら、互いの呼吸を感じていた。

美咲はそっと手を伸ばし、優太の寝息を確認してから、美奈の指に自分の指を絡めた。美奈が美咲の手を握り返す。暗闇の中で、二人の女性だけが共有する秘密の触れ合い。

美咲は天井を見つめながら、確信していた。

—もう、優太だけじゃ満たされない。

それは優太への愛が消えたということではなかった。ただ、美奈への渴望が、優太への愛を押しつけて膨らんでいった。風船のように。いつか弾けることを知りながら、止められない膨らみ。

美咲は美奈の方へ体を寄せた。優太の腕をまたぎ、美奈の肩に顔を埋める。美奈の肌の匂い。シャンプーの香り。そして、事後の微かな汗の匂い。

—この子の全部が欲しい。

美咲の心の中で、暗い花が咲いていた。

六
翌朝。

優太は朝食を作り、二人の女性に振る舞った。

「おはよう。よく眠れた？」

「うん、ありがとう」

美咲は笑顔で答えた。美奈も小さく頷く。優太は二人の笑顔を見て安心したように微笑んだ。

「よかった。これからも三人で仲良くしていこうね」

優太の言葉は、心から出たものだった。この男は本当に、二人を愛している。どちらも傷つけない。どちらも手放せない。その優しさが、残酷な結末へと導くとも知らずに。

美咲は優太の笑顔を見つめながら、思った。

——優太、ごめんね。でも——

美咲の視線が、優太から美奈へと移る。美奈が気づいて、小さく首を傾げた。

美咲は心の中で囁いた。

——私、もう美奈ちゃんなしではいられない。

朝食の後、美奈が帰る際、美咲は美奈の耳元で囁いた。

「来週、優太が出張でいない日があるの。その日——来てくれる？」

美奈は驚いたように目を見開いたが、やがて小さく頷いた。

「……うん」

その約束は、美咲と美奈だけの秘密。優太の知らないところで、二人の関係は急速に深まっていた。

—— 第三章：背徳の温もり ——

—

水曜日の朝。

優太はスーツケースを玄関に置き、ネクタイを締めながら美咲に向き直った。

「三日間の出張になるけど、何かあったら連絡してね」

「うん、気をつけて」

美咲は優太の胸元を整え、そっと微笑んだ。夫を出迎える妻の顔。六年間練習してきた、完璧な笑顔。

優太は安心したように美咲の頭を撫で、リビングのテーブルに一万円札を置いた。

「これ、何かあってもらって。美奈ちゃんも呼んで、寂しくないようにね」

「ありがとう」

優太は軽くキスをして、家を出た。ドアが閉まる音。足音が遠ざかる。エレベーターの音が消えるまで、美咲は静かに待った。

そして――

スマホを取り出し、美奈にメッセージを送った。

『今夜、来てくれる？ 優太、出張なの』

返信は五秒で来た。

『うん。行く』

美咲はスマホを胸に抱きしめた。心臓がうるさいほど鳴っている。優太を見送った時とは全く違う鼓動。これは――恋をしている女の鼓動だ。

つづく